

『物流Weekly』連載原稿

「日本ロジファクトリーの物流ケース・スタディー」第3回

<タイトル>

「物流改善は個々の力の結集」改善着手順序とその具体策

<本文>

前号の私の『問題点』をもとに『改善の着手順序』を述べる。

改善の着手順序 現状の中途半端になっている物流改善の修正（元の状態に戻す） 物流管理指標算出による現状の把握とボトルネックの抽出 ボトルネックの改善 その周辺業務の調整 各人に仕事内容を理解・徹底させる 数値による現場管理の実施。

以上が今回、私が着手した改善であり、～の順序に従って改善していった。その具体策は次の通り。

物流改善のプロジェクト（PJ）メンバーの選出と決定

これは、PJメンバーに『改善が〇社全体を上げての責務』で、『今までのように改善が中途半端なものに終わらないようにするための布石』と理解してもらい、自覚と責任を持ってもらうという意味合いがある。

改善期間の決定と綿密なスケジュールリングの作成及びその後の進捗確認

改善期間を決定しておき、ダラダラとPJが進行することを防止する。また、改善項目ごとに担当者を決定し、進捗確認を行うことで、中途半端に終わらないように、二重チェックの役割も担わせる。

中途半端になっている物流改善を元に戻す

これは、改善を行う前の下地を作っておくことを狙ったもの。強引に改善を実施しても中途半端のままになった現場では、うまくできたとしても、必ず現場がボトルネックとなり、全体としての改善効果が出なくなってしまう。それを防止するための措置である。

物流管理指標算出による現状の把握とボトルネックの抽出

ここからがようやく物流改善の第一歩である。今まではマイナスの現状打破への措置。まず、〇社の全員に現状の数字を理解して頂くことで危機感を持ってもらうと同時に、この物流改善がやらなくてはならない必須のものであるとの認識を持って頂く。

物流改善で失敗する原因には、『従業員が物流改善に対して関心がない』、もしくは、『他人事である』といったものが多い。失敗しないためには、全員が『物流改善』というベクトルに沿って行動しなければならない。そのための一番の『くすり』が、現状の物流センターを数字で表し、従業員に把握させ危機感を持たせることである。パートやアルバイトには全部の数字を見せるのではなく部分的に開示することが重要で、情報開示を行うことが『ミソ』である。現場で実際に生産活動を行っているのは過半数を占める彼らであり、その一人ひとりが数字を意識した作業を行ってくれば、生産性は二〇%以上増加する。実際に生産活動を行っている大多数の彼らこそ、現場の問題点や疑問点を持っているものであり、その意識を全体として高めていくことが重要なキーワードだ。『自発性』が全体の改善にシナジー（相乗効果）を産み出すのである。

（次週に続く）